

# 学生生活における RE-CREATION 行動に関する研究

— N 大学理工学部の場合 —

○阿部信博 川井 昂 吉本俊明 澤村 博 齊藤虎征 岩田 惇 小川 貫  
(日本大学)

学生生活 Re-creation 快 不快

## 1. はじめに

近年、大学の大衆化が進んできたことは周知のことである。ここ数年進学率が横ばいの状態からわずかながら減少する傾向にあるとはいえ、大学や短大に在籍する学生が同年令層のおよそ35%になる。それだけに、大学生の人間像は極めて多彩なものと思われる。

1980年に神戸大学で行われた調査では、大学進学目的のなかに「クラブ活動やレジャーなど学生生活をエンジョイするため」と答えている学生が20%であった(二肢までの重複選択回答)<sup>4)</sup>。京都大学の昭和55年度入学者のうち、進学の最も強い動機として「大学生活をエンジョイするため」と答えた学生がおよそ3%あった。そして神戸大学の調査のなかで、人生の送り方の希望に「金や名誉を考えずに自分の趣味にあった暮らしをしたい」と答えている学生が12%あった(二肢までの重複選択回答)。また、<sup>8)</sup>1977年経済企画庁の大学生の進学動機についての報告によると、「幅広い豊かな教養の修得」、「専門的な知識や技術の習得」、「学生としての自由時間をもつこと」の三つが最も多く選ばれ、「学生としての自由時間……」を選択した学生が男子で43.8%、女子で58.4%いる(三項目選択回答)。さらに、1980年日本リクルートセンターの報告による女子学生の場合では、「もっとも充実感や生きがいを感じる」ときの問いに対し、「勉強・ゼミナール」と答えた者が14.3%、「人との交流」が53.7%、「趣味・レジャー」が22.2%、「クラブ・サークル・同好会活動」が9.1%となっている。

上記の調査・報告によっても、現代学生のなかで、自由時間を持ち、それを趣味やレジャーに充てることに幸福感や充実感を覚えるという者がかなりの割合をしめることがうかがえる。

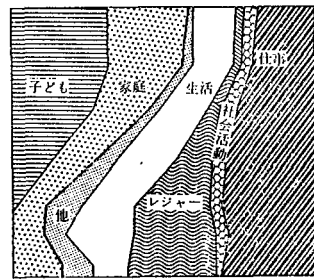
現代の学生は、かつてより、無気力、しらけ世代などといわれてきたが、併せて安定志向、遊び志向、私事主義などいろいろに評されている。現代の社会の豊かさ、価値の多様化は“より高い価値をめざして、物事にまじめに深く関心を持ち、情熱をもやす”といった生き方を希薄にさせているものと思われる。

S.フロイトは、人間を、基本的には無意識のなかのものを含め、諸欲求を充足することにより、“快”を得ようと行動するものとみている(快への意志)。A.アドラーは、フロイトの快楽原理に納得できず、人間は、より優れたものになりたい、他人の上に立ちたい、支配したいといった欲望を強くもち、「権力への意志」をもつものとみている。さらに、V.E.フランデルは、快楽への意志、権力への意志は人間存在のそれぞれの契機にすぎないとして、人

間は究極的には「意味への意志」をもつ存在であるとして、自己の生命を意味あらしめようとするのが人間であるとみている。<sup>2)</sup>

図-1は生きがいの年令的变化を示したものであるが、生きがいは年令によって変化していることがうかがえる。

図-1 生きがいの年令的变化 (男性)



これは、快楽への意志、権力への意志、意味への意志が人間の精神の発達に対応し、また外界に適應していることなどによる変化と考えられる。しかし、大学生にあたる

年令まではおおよそ4人に1人が遊び志向をもっていることが考えられ、安定と適應を求めがちな現代青年がほんとうの生きがいを感じているかは疑問である。大学生時代がE.H. エリクソンのいうモラトリアム期であることは間違いないと思われるが、モラトリアムをどういう意味内容でとらえるか、また、悩み苦しんでアイデンティティを問うことも大学生にとって重要なことと考える。

本研究では、恵まれた学生生活を享受しているようにみえる現代学生の日常生活のなかから、学生心理の一面を“快”“不快”の観点からのぞき、具体的にどのような行動に“快”“不快”を覚えるかをあきらかにし、学生の志向をさぐってみたい。

哲学事典によれば、“快”は環境の様相に対する受容(不快は拒絶)の態度であり、ゆえに快は、好み、望み、求め、獲得し、維持永続させようとする対象または状況に結びつく概念であるとしている。さらに広辞苑には、こころよいこと、心にかなうこと、面白いこと、とある。

このような、好み、望み、求め、心にかなうことなどの行動によって人間はRecreatされるものと考えられる。

しかし、このような環境の様相は、設定されたRecreationのための特定の場面に限らずとも、日常生活のなかで、美しい、感じがよい、好き、美味しい……といった“快”の経験が得られるはずである。つまり、「仕事や勉強などの疲れを、休養や娯楽によって精神的・肉体的に回復すること。またそのために行う休養や娯楽」<sup>6)</sup>、「余暇に任意で参加できる活動であり、これらの活動への参加は個人的な楽しさ、あるいは満足感によって動機づけられている」、といったRecreationの概念からすれば、睡眠や食事、授業

を受けることなどによって得られる“快”がRecreationの範疇として考えることは無理であるが、学生生活の幅広い行動のなかで得られる“快”がRe-creationとしての意味をもつものではないかと考えられるのである。

## 2. 調査の方法

昭和59年5月及び昭和60年5月にN大学理工学部1年生259名を対象に表-1のような調査用紙(一部)による189項目についてのアンケート調査を行った。調査項目の内容は、睡眠、食事、通学、談話、コンパ、授業、勉強、買物、読書、家事、天候、サークル活動、芸術作品や映画・音楽の鑑賞、テレビ・ラジオ、嗜好などに関するものである。

表-1 調査用紙と回答の方法

① 快-不快の程度は右のスケールのようにになっています。  
 例えば、設問の状況が非常に快を感じるなら、スケールの5を○で囲んで下さい。

② わからない項目については回答しないで下さい。

1	2	3	4	5
非常に不快	不快である	どちらでもない	快を感じる	非常に感じる

1. 夜の睡眠
2. 休日(日、祭日等)の昼寝
3. 授業中のうたた寝
4. 休み時間中のうたた寝
5. 電車、バスの中でのうたた寝
6. 自由時間中のうたた寝
7. 一人で黙々と朝食をとる
8. テレビを見ながら朝食をとる
- ...
- ...
- ...

集計は「非常に不快である」と「不快である」は「不快」に、「非常に快を感じる」と「快を感じる」は「快」としてまとめ、「どちらともいえない」と3段階に分類した。

## 3. 結果と考察

### (1) 授業について(表-2)

授業に関しては体育実技以外は快の傾向はみられず、一般教養については不快が快よりも多数を占めている。これは、はじめに述べたように進学の動機や目的を専門科目に重点を置いていることや、文化系学生と理工系学生の違いなどによるものと思われる。本調査対象が1年生であることから、授業や勉強に関しては進級とともに意識が変化し、快、不快の受けとめ方も変わってゆくものと推察される。

表-2 授業

	不快	どちらともいえない	快
大学での専門科目の授業	51人 19.7%	154人 59.5%	54人 20.8%
大学での一般教養(体育を除く)	83 32.2	153 59.3	22 8.5
大学での体育理論	69 26.7	157 60.9	32 12.4
大学での体育実技	18 7.0	64 24.9	175 68.1

表-3 勉強・相手の有無

	不快	どちらともいえない	快
一人で黙々と勉強する	70人 27.1%	140人 54.3%	48人 18.6%
友人と勉強する	51 19.8	142 55.0	65 25.2

### (2) 勉強について(表-3, 4, 5)

勉強は自宅や図書館でやることに快を感じる者が多く、逆に喫茶店やサークル室、教室では不快を感じている人が

表-4 勉強・場所

	不快	どちらともいえない	快
自宅	30人 11.7%	142人 55.3%	85人 33.1%
友人宅	63 24.6	144 56.3	49 19.1
図書館	41 16.0	134 52.1	82 31.9
研究室	49 23.4	148 70.8	12 5.7
サークル室	74 35.7	126 60.9	7 3.4
教室	56 22.0	175 68.6	24 9.4
喫茶店	85 34.6	126 51.2	35 14.2

多い。これは喧騒を嫌っているためと思われ、このことは、おしゃべりやテレビをみながら勉強することにも不快を感じている人が多いことからうかがえる。しかし、1人で黙々と勉強することにも不快を感じる人も多く、音楽を聞きながら勉強す

表-5 勉強・何かをしながら

	不快	どちらともいえない	快
音楽を聞きながら	51人 19.9%	87人 34.0%	118人 46.1%
テレビを見ながら	106 41.7	108 42.5	40 15.7
ラジオを聞きながら	83 32.4	112 43.8	61 23.8
おしゃべりをしながら	113 44.1	105 41.0	38 14.8

ることに快を感じる人が多いことなどから必ずしも1人静寂のなかで勉強することが快とはいえないと考える。

(3) 読書について(表-6)

表-6 読書

	不快	どちらとも いえない	快
専門書・テキスト	89 人 34.8 %	133 人 52.0 %	34 人 13.3 %
一般教養のテキスト	103 40.1	136 52.9	18 7.0
体育理論のテキスト	110 43.5	134 53.0	9 3.6
文芸作品	73 28.5	107 41.8	76 29.7
SF小説	45 18.4	95 38.8	105 42.9
推理小説	37 14.6	81 32.0	135 53.4
自伝	70 27.7	134 53.0	49 19.4
スポーツに関する図書	17 6.7	100 39.2	138 54.1
旅行に関する図書	8 3.1	82 31.9	167 65.0
趣味の図書	2 0.7	24 9.3	233 90.0
新聞・雑誌	4 1.6	65 25.4	187 73.0
マンガ	4 1.6	47 18.3	206 80.2

趣味の図書やマンガをはじめ、雑誌、旅行、スポーツ等比較的軽い気持ちで読めるものに快を感じる者が非常に多く、さらにSFや推理小説などに興味を示す者も多い。逆

表-7 談話の相手・飲食

	友人			家族			先生		
	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快
喫茶・軽食を とりながら	1 人 0.3 %	23 人 8.9 %	233 人 90.7 %	17 人 6.7 %	118 人 46.8 %	117 人 46.4 %	55 人 24.4 %	112 人 49.8 %	58 人 25.8 %
飲酒をしながら	2 0.9	25 9.8	227 89.4	26 10.7	115 47.5	101 41.7	38 16.6	89 38.9	102 44.5

表-8 談話の内容と相手

	友人			家族			先生		
	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快
学問研究に 関して	36 人 14.1 %	114 人 44.7 %	105 人 41.2 %	62 人 24.8 %	148 人 59.2 %	40 人 16.0 %	59 人 25.2 %	101 人 43.2 %	74 人 31.6 %
自分の将来に 関して	17 6.7	118 46.8	117 46.4	42 16.7	149 59.1	61 24.2	39 16.8	120 51.7	73 31.5
異性に関して	1 0.4	50 19.3	208 80.3	73 29.1	136 54.2	42 16.7	46 19.8	136 58.6	50 21.6
レジャーに 関して	0 0	28 10.8	231 89.2	10 3.9	132 52.0	112 44.1	40 17.2	117 50.4	75 32.3
サークルに 関して	7 2.9	93 39.1	138 58.0	18 7.7	177 75.3	40 17.0	35 15.4	132 57.9	61 26.8
アルバイトに 関して	2 0.8	99 38.8	154 60.4	22 8.8	180 72.0	48 19.2	40 17.2	157 67.4	36 15.5

に文芸作品や自伝に対しては快を示す者は減少し、テキスト類に関しては不快を示す者が多い。しかしテキスト類に関しても快を選択している者が存在していることも見逃せないと考える。

(4) 談話について(表-7, 8)

談話の相手については友人との談話に非常に高い割合で快を示し、次いで家族との談話に快を示す者が多くなっている。先生との談話では飲酒をしながらの場合に快を感じる者が多くなっているがこれはアルコールによって普段ではうかがい知れない教師の姿がみられることや、同じ立場に近いところで語れることなどによるものと考えられる。談話の内容についても友人と語ることでは全てに快を感じる者が多くなっているが、家族との談話では学問研究や自分の将来に関する談話についてはどちらともいえず、先生との談話においても自分の将来に関しての談話では快を感じる者が多いものの、学問・研究においては快の傾向がみられる程度である。レジャーやサークルに関しては家族や先生との談話にも快を感じる者が多く、学生の快楽志向がうかがわれる。

(5) 音楽・映画の鑑賞について(表-9)

演歌、日本民謡には不快を感じ、映画や他の音楽については快を感じる者が多くなっている。特に映画とポピュラーやロックの音楽項目についてより高い割合で快を示した。若者の風俗を物語るものと推察される。

(6) 芸術品の鑑賞について(表-10)

前述の音楽・映画の鑑賞と同様、日舞、書道などの日本の芸術には不快を示す者が多いが洋画には快を示す者が多く、彫刻には快の傾向がみられる。

表-9 音楽・映画の鑑賞

	不快	どちらとも いえない	快
クラシック音楽	40人 15.6%	119人 46.5%	97人 37.9%
ジャズ	38 15.0	121 47.6	97 37.4
ロック	30 11.7	58 22.7	168 65.6
ポピュラー	4 1.6	39 15.2	213 83.2
演歌	135 52.9	76 29.8	44 17.3
日本民謡	149 59.4	85 33.9	17 6.8
西洋映画	2 0.8	32 12.4	225 86.9
日本映画	8 3.1	58 22.4	193 74.5

表-10 芸術品の鑑賞

	不快	どちらとも いえない	快
日本画	58人 23.1%	127人 50.6%	66人 26.3%
洋画	34 13.5	104 41.4	113 45.0
書道	81 32.3	135 53.8	35 13.9
彫刻	50 20.1	129 51.8	70 28.1
民芸品	68 27.1	123 49.0	60 23.9
生活芸術品 (ハンドクラフト)	57 22.8	136 54.4	57 22.8
日舞	105 44.3	121 51.1	11 4.6

## (7) テレビを見る(表-11)

特集番組、スポーツの実況、バラエティショウ、ドラマ、クイズ番組、歌謡番組、ニュース番組、スポーツ教室、社会番組の順で快を感じる者が多く、逆に語学教室、教養講座、政治・経済番組、劇場中継の順で不快を感じる者が多くなっている。これは前述の読書における傾向に似ていると思われる。テレビを見る時間帯や家族団らんということを考えればテレビが真剣に教養や情報を得るメディアになり得ない場面もあることがひとつの要因であることも考えられ、身近な情報や安易に受け入れられる番組に快を感じるといえる。また、スポーツの実況中継に快を感じずのはうなずけるが、他の教養講座に比べてスポーツ教室にも快を感じる者が多く、現代の学生がスポーツに高い関心を示していることを物語るものと考えられる。

## (8) ラジオを聞く(表-12)

前述のテレビを見るのと同様、ポピュラー音楽、歌謡番組、スポーツの実況、ニュースを聞くなどに快を感じる者が多く、クラシック音楽を聞くことに快の傾向がみられ

表-11 テレビを見る

	不快	どちらとも いえない	快
ニュース番組	16人 6.2%	130人 50.6%	111人 43.2%
歌謡番組	27 10.5	107 41.6	123 47.9
ドラマ	17 6.6	90 35.0	150 58.4
劇場中継	65 25.8	143 56.7	44 17.5
バラエティショウ	22 8.6	79 31.0	154 60.4
クイズ番組	25 9.7	96 37.1	138 53.3
スポーツ教室	28 11.1	146 57.7	79 31.2
スポーツの実況中継	19 7.4	72 28.1	165 64.5
語学教室	104 40.8	133 52.2	18 7.1
教養講座	101 40.2	126 50.2	24 9.6
特集番組	13 5.1	76 29.7	167 65.2
社会番組	44 17.3	128 50.4	82 32.3
政治・経済番組	76 30.0	125 49.4	52 20.6

表-12 ラジオを聞く

	不快	どちらとも いえない	快
ニュースを聞く	36人 14.0%	155人 60.1%	67人 26.0%
交通情報	55 21.7	168 66.1	31 12.2
クラシック音楽	61 23.9	114 44.7	80 31.4
ポピュラー音楽	7 2.7	52 20.3	197 77.0
歌謡番組	26 10.2	75 29.4	154 60.4
英語	90 35.4	133 52.4	31 12.2
スポーツの実況	38 14.8	105 41.0	113 44.1
寄席	91 36.1	114 45.2	47 18.7

## (9) 買い物について(表-13)

どの項目においても数字のうえでは快が不快をうわまわる割合を示している。食事の材料や専門書・テキストを買うことに快を感じる者が不快を感じる者よりもやや多い程度であるがその他の項目では快を示す者が多い。これは買物好きをあらわしているものと考えられ、特にスポーツ用品、セーターやジーンズ、あるいはスイッチひとつで操作出来る電化製品の買い物はコンパ・パーティの材料や日

る。逆に英語、寄席、交通情報などを聞くことに不快を示す者が多く、ここでも現代学生の勉強ぎらいと、興味の問題も勿論かわることであろうが、ある程度腰を据えて話しを聞くことを嫌う傾向もうかがえる。

用品・雑貨の買い物よりも高い割合で快を示しているのは、現代学生のスポーツ好きやファッション性を物語るものであろうか。

表-13 買い物

	不快	どちらとも いえない	快
食事の材料	50人 20.4%	123人 50.2%	72人 29.4%
コンパ・パーティーのための材料	20 8.1	97 39.4	129 52.4
日用品・雑貨	22 8.5	124 48.1	112 43.4
衣類（セータ、ジーンズなど）	16 6.4	71 28.3	164 65.3
専門書・テキスト	44 17.0	160 61.8	55 21.2
趣味の図書	5 1.9	50 19.3	204 78.8
新聞・雑誌	8 3.1	110 42.8	139 54.1
電気製品（テレビ、ステレオなど）	3 1.1	52 20.1	204 78.8
スポーツ用品	4 1.6	74 29.2	175 69.2

(10) その他について

これまで、掲載した表について述べてきたが、これらの他に、睡眠、通学、サークル活動、食事、コンパ、嗜好品、家事、天候等について概説してみたい。

睡眠については、休日の昼寝、夜の睡眠に快を感じている者がおよそ4人中3人いるのに対して、不快と答えている者が100人中8～9人の割合で存在していることは健康面で注目しなければならないと考えられる。また、授業中のうたた寝が休み時間中や電車・バスのなかでのうたた寝よりも快の傾向が高かったことは、授業中のいねむりに対してうしろめたさを感じる割合が低いことのあらわれと思われる。

次に通学では、通学的手段として一般的な徒歩、電車、バスについては快と答えている者がおよそ11～15%、不快と答えているのが40～41%あって、通学者のかなり多くの者が通学手段に関しては不快を感じているといえる（調査対象者の79.6%は電車、バスのいずれかを利用し、また徒歩と答えている）。自分で乗り物を運転して通学するものでは、自家用車、オートバイ、自転車の順で快と答えている者が多い。通学手段としてはかなり多くの学生が不快を感じているが、ウォークマン等で音楽を聞きながら通学した場合には快と答えているのが49.6%あり、不快と答えているのが13.9%であった。しかし、語学テープを聞いたり、テキストを読んだりして学習しながら通学することについては不快を感じずる者が非常に多く、新聞や雑誌を読んだり、ラジオをききながら通学することには不快を感じずる者が多い。また、友人と通学することには快を感じている者が多くなっている。

サークル活動に対しては、実際の活動をやっているときに63.4%と最も多くの者が快を示し、発表や対外試合に43.8%、活動の準備に33.7%、ミーティングに28.1%の者がそれぞれ快を示している。逆に後片付けには不快を感じている者が多くなっている。

食事については朝食、昼食、夕食に限らず1人で黙々と食事をとることに不快を示す者が多く（不快39%、快7.1%）、友人や家族と話しながら食事をとることに快を示す者が多い（友人との食事が80.2%、家族との食事が59.8%）。食事の場所についてはレストラン（外食）や自宅で食事をとることに朝、昼、夕食に限らず快を示す者が多く、さらにキャンパス内での昼食や友人宅の昼食と夕食でも快を示す者が多くなっている。また、テレビを見ながらやステレオを聞きながら食事をとることに快を感じる者が多く、テレビを見ながら夕食をとることにもっとも高い割合で快を示している。家族とテレビを見ながら夕食をとることがかなりのウエイトをしめていることがうかがえる。ラジオを聞きながら食事をとることは快、不快どちらともいえず、専門書・テキストを見ながらの食事では多くの割合で不快を示している。

コンパについては、クラス、サークル、仲間、中・高校の同窓会等のコンパにおいては当然のことと思われるがすべて快を感じる者が多く、特に仲間同士のコンパについては89.6%の高い割合を示し、中・高校同窓会コンパが85.5%、クラスコンパが63.8%の順となり、サークルのコンパは最下級生のためか53.6%とこのなかでは低い割合であった。

次に嗜好品については、酒を飲む、タバコをすう、コーヒー・紅茶を飲む、コーラ・ジュースを飲む、ケーキ・チョコレートを食べる、の項目のなかで、タバコをすう以外はすべてに快を示す者が多く、特にコーヒーやコーラを飲むことに80%以上の高い割合で快を示し、次いで酒を飲むが70.5%、ケーキ・チョコレート<sup>9)</sup>を食べるが59.8%となっている。しかし、空腹感や体調などによって、この快の割合は変化するものと考えられる。タバコを吸うことについては49.6%が不快を示しているものの31.5%の者が快を示しており、タバコを普段すっている者とすわないものの比率がここにあらわれたものと推察される。

家事では食事の後片付け、草花の手入れ、庭木の手入れ、家のまわりの清掃などには不快を示す者が多く、食事の準備、家・部屋の清掃はどちらともいえない結果であった。

天候は、晴れている日には92.9%、暖かい日には76.0%の者が快を示し、雨の日には72.6%、曇っている日には37.8%、暑い日には52.5%、寒い日には55.6%、風の強い日には62.4%の者が不快を示している。

4. 結 び

今調査から、N大学理工学部学生の志向や文化の一端をのぞくことができたが目立った点についてまとめてみると、先ず勉強を嫌う傾向にあり、なかでも教養志向に乏しい（専門志向が高いことではない）。1982年版「アルバイト

白書」によると、職業的知識・技術の修得、授業の熱心度、クラブ・サークル活動などから11名の学生を比較してみると明らかにアメリカの学生は勉強タイプであり、日本の学生は遊びタイプであるという。要因として様々な背景が考えられるがここでは言及をさけない。いわば快楽志向にある学生が多いと考えられ、今回の調査では随所にこうした傾向がうかがえた。

次に、友人とのかかわり合いを非常に重視していることがうかがえる。大学生は行動範囲も広くなり、新しい友人を見つけて別の世界をのぞくこともあり、そして人生観などを豊かにしていくものと思われるが、こうしたことを家族や教師よりも友人により多く求めていると考えられる。

さらに、日常のいろんな場面で音楽とのかかわりを望み、非常に音楽好きである。しかし、音楽をじっくり聞くといったものではなく、テレビの歌謡番組やポピュラー、ロックなどを何かをしながら気軽に聞くといった傾向であり、音楽を聞くというより音楽があるといった音楽とのかかわり方がうかがわれ、本当の音楽好きであるといえるかは疑問である。

読書についても格調の高い荘厳さよりも、気軽に読める趣味やスポーツ等に関する(スポーツを好む傾向が強い)図書に興味を示し、マンガを好んでいる。

買い物からは現代学生のファッション性の一端ものぞかれた。

これらのことから今研究で得られたことは、学問志向が低く、いわば学生生活の本質的なことよりも副次的なクラブ・サークル活動、音楽、マンガ等の軽い読書、ファッションなどに快を求める傾向にあり、それによって快を感じ、Recreat されていると考える。はじめに述べた V.E. フランデルの説を適用するならば人生の過渡的傾向といえるだろうか。しかしその過渡期にとどまり、そこに自己主張、アイデンティティを求めてしまうと仮定(現代のキャンパスには多分にこうした雰囲気を感じられると思われるが)するならばなしさも感じないではない。調査対象が1年生であったこと、調査の時期、大学の授業、あるいは学生心理の深層にふれる設問のしかた等を考慮し、今後検討を加えたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 波多野完治 著者代表  
現代教育心理学大系—適応理論—  
中山書店 1957
- 2) 藤原嘉悦 編  
現代青年の意識と行動 3 生きがいの創造  
大日本図書 1984
- 3) 神谷美恵子 著作集 1  
生きがいについて  
みすず書房 1985
- 4) 笠原 嘉・山田和夫 編  
キャンパスの症状群—現代学生の不安と葛藤—

- |                                 |  |            |
|---------------------------------|--|------------|
|                                 | 弘文社  | 1986       |
| 5) 教師養成研究会・教育心理学会               | テキスト青年心理学  | 学芸図書 1970  |
| 6) Meyer, H.D. Brightbill, C.K. | Community Recreation: A Guide to Its Organization (Erglewood Cliff, N.J. : Prentice-Hall 1969) |            |
| 7) 新村 出 編                       | 広辞苑第2版補訂版  | 岩波書店 1976  |
| 8) 関 崎一・返田 健 編                  | 大学生の心理   | 有斐閣 1985   |
| 9) 社会科学大事典編集委員会                 | 社会科学大事典(2)   | 鹿島出版会 1968 |
| 10) 哲学事典                        |  | 平凡社 1971   |